

社会的達成目標に関する研究動向

篠原由花

論文要旨

近年、社会的達成目標に関する研究が増えている。社会的達成目標とは、社会的な場面における達成目標志向性であり、対人関係能力への志向性を表わすものである。本論では、これまでの社会的達成目標研究の中で主要なトピックである学業への取り組み・クラスの目標構造・感情・社会的適応の4指標との関連について概観した。そして、以下の3つの視点から現在の社会的達成目標研究の問題点を述べ、今後の課題を考察した。まず、社会的達成目標の規定因を特定し、理論的な枠組みに依拠している社会的達成目標の妥当性を高めることが必要である。次に、社会的達成目標と、現場への介入に適した目的変数を取り上げることである。最後に、社会的達成目標から目的変数への直接的な影響だけでなく、媒介要因の可能性や因果関係に目を向けながら今後の研究を進めていくことが求められる。

キーワード【社会的達成目標、目標志向性、対人関係、青年、展望】

はじめに

社会的な場面において個人が追求する目標を取り扱う社会的目標研究の多くは、これまで、どのような目標を持っているかという観点から行われてきた。これは、個人が持つ目標の中身やその目標を追求することによって得られる結果に焦点を当てたアプローチだが、近年、達成目標理論の枠組みを用いたアプローチにも注目が集まっている。

達成目標理論は学業領域やスポーツ領域で多く応用され、研究も蓄積されてきた。学業領域では、主に、熟達目標と遂行目標の二つの目標に分類され、成績や学習性無力感などとの関連が検討されてきた。熟達目標は、課題を通して自身の能力を高めようとする志向性であり、学習や達成を促進する。一方、遂行目標は、自身の能力について他者から良い評価を得、悪い評価を避けることを目指す志向性である。遂行目標は、自身の能力に自信がある場合は熟達目標のように学習や達成を促進するが、自信がない場合は無気力などと関連することが示されてきた。こうした初期の達成目標理論を基に、達成目標の階層モデルが提示された(Elliot & Church, 1997; Elliot & McGregor, 2001)。階層モデルでは、課題に対し接近的であるか回避的であるかという次元を新たに加え、熟達目標・遂行接近目標・遂行回避目標の

3つに分類された。熟達目標は達成動機づけや内発的動機づけと正の関連があり、遂行接近目標は達成動機づけ・失敗への不安と正の関連があり、遂行回避目標は内発的動機づけと負の関連があることが見出された。このように、主に学業達成場面で多くの研究が行われてきたが、達成目標理論は社会場面や友人関係場面などにも拡大されるようになった (Dweck & Leggett, 1988 など)。Ryan & Shim (2006) は、友人関係に対して持つ目標を検討する際、達成目標アプローチを用い、対人関係能力への志向性により社会的達成目標 (social achievement goals ; 以下 SAG とする) を概念化した。これは、友人関係に対しどのような内容の目標を持っているかではなく、どのような目標志向性を持つかによって個人を分類し、自身の対人関係場面における能力を伸ばしたいか、それとも他者に示したいかを捉えることで友人関係を理解しようとするものである。SAG は、児童から青年を対象に、学校場面におけるさまざまな変数との関連が検討されてきた。

本論では、近年増えてきた SAG 研究の動向をまとめ、今後の課題を考察する。

社会的達成目標

Ryan & Shim (2006; 2008) は、対人関係場面での能力を伸ばしたいか、それとも自身の能力を他者に示すことを目標とするかにより個人の認知や行動は異なるとして SAG の尺度を作成した。SAG 尺度は全 12 項目で構成され、社会的発達目標・社会的提示接近目標・社会的提示回避目標の 3 下位尺度に分類される。SAG の 3 下位尺度は、それぞれ、学業領域における熟達目標・遂行接近目標・遂行回避目標に対応するものであるが、学業上の達成目標とは独立した、別個のものである (Ryan & Shim, 2006)。社会的発達目標では、自己の能力への評価基準は自分自身にあるが、社会的提示目標では、他者の評価が自身の能力の基準となる。つまり、後者においては対人場面での能力が高いこと、あるいは能力が欠けていないことを他者に示すことに焦点が当てられる。

社会的発達目標 (social development goal ; 以下、発達目標とする) は、学業領域における熟達目標と同様に、自身の対人関係場面の能力を発展させ、改善していこうとする志向性である。そのため、新しいことを学ぶこと、対人場面での能力を高めていくことや自身について洞察を得ることを目指す。友人関係の質を高め、自身の向社会的スキルを改善していくことに焦点が置かれ、量よりも質が重視される。項目は、「いつも対人関係のスキルを伸ばそうと努力している」「自分自身の新しい側面を発見できるような友人関係が好きだ」「周囲の人との関わり方について、新たな発見をすると『うまくいった』と思う」「友人との関係の質を高める努力をすることは自分にとって大事だ」の 4 項目である¹⁾。

社会的提示接近目標 (social demonstration-approach goal ; 以下、提示接近目標とする) は、自身が社会的に有能であることを周囲に示し、社会的地位を得ることや他者から良い評

価を得ることへの志向性である。つまり、他者から良い評価を得て、それを周囲に示すことが重要となる。提示接近目標の追求は、友人関係の質よりも多くの友人を持つことや人気を得ることに重きが置かれる。学業領域における遂行接近目標のように、高い達成や評価を目指す傾向とともに、失敗不安から他者の評価を気にする傾向も持つ複雑な目標志向性であると考えられる。「“カッコいい” 友達をもつことは自分にとって大事だ」「周囲の人に人気者だと思われることは自分にとって大事だ」「“人気のある” 人と友達になりたい」「たくさんの友達がいるように見られることは自分にとって大事だ」の4項目から構成される。

社会的提示回避目標 (social demonstration-avoid goal; 以下、提示回避目標とする) は、対人場面における能力が欠落していないことを周囲に示し、他者からの悪い評価や拒絶を回避することへの志向性である。そのため、対人関係場面に積極的に近づくよりは、悪い評価を得る可能性のある場面からは距離を置き衝突を避けようとするなど、不適応的な行動との関連が指摘されてきた。「他の人と気まずくなるのを避けることができれば『うまくいった』と思う」「周囲の人にかかわれないようにすることを目標としている」「誰かといるとき、自分が変人だと思われないようにできると『うまくいった』と思う」「人と気まずいとき、へまをしないようにしている」の4項目である。

さまざまな指標との関連

学業への取り組みとの関連

Shim & Finch (2014) は、中学生を対象に、学業上の達成目標と SAG を組み合わせ、潜在クラス分析を用いて参加者を分類し、学業への取り組み・援助要請行動・学習方略・学業上の信念や知覚・社会的適応との関係を検討した。その結果、高い熟達目標を持つ場合、SAG はあまり効果がなかった。しかし、3つの学業達成目標が中程度の値をとるグループの場合、SAG が5つの結果変数に良い影響を与えていることが示された。

Liem (2016) は、高校生における SAG と学業上の達成目標が学業達成や社会的満足感、協力学習や競争的学習といった社会的-学業的変数に与える影響を検討している。その結果、クラスメイトとの相互作用が必要とされる学習 (協力学習、競争的学習) においては、学業上の達成目標だけでなく SAG も影響を及ぼしていた。発達目標は協力学習・社会的に統制された学習・自己制御学習を促進していた。一方、提示回避目標は競争的学習と社会的に統制された学習を促進していた。提示接近目標は競争的学習を促進していたが、自己制御学習は抑制していた。また、発達目標と遂行接近目標の交互作用もみられ、発達目標が高く、遂行接近目標も高いときに協力学習が最も高くなることが示された。

こうした研究は、学業への取り組みに対しては学業達成目標が主要な影響を及ぼすものの、SAG の重要性も示しているといえるだろう。

クラスの目標構造との関連

SAG とクラスの目標構造との関連を検討した研究に、Shim, Cho, & Wang (2013a) がある。彼女らは、中学生におけるクラスの目標構造がSAGと学業への取り組み、社会的適応に影響を与えるとして、共分散構造分析を用いて分析を行った。その結果、クラスの目標構造はSAGに影響を与え、SAGは学業への取り組みと社会的適応に影響を与えていた。つまり、発達目標はクラスの熟達目標構造により促進され、その後の学業への取り組みと社会的満足感を高めていた。一方、提示回避目標は、クラスの遂行目標構造により促進され、その後の反抗的態度を減じ、社会的悩みを高めていた。提示接近目標は、熟達目標構造からは負の、遂行目標構造からは正の影響を受け、クラスでの反抗的態度や社会的悩みを高めることが示された。

高校生においても、同様の結果が報告されている (Makara & Madjar, 2015)。2年間にわたりSAGの変化を追跡した結果、SAGは概して安定していたが、教育的文脈をどう知覚するかによる影響を受けやすいことが見出された。生徒の初期のSAGは、性別や成績、クラスの目標構造と同級生の雰囲気はどう知覚しているかにより異なっていた。特に、遂行回避目標の高いクラスは、時間経過とともに提示目標が高まり、発達目標が低下する傾向にあった。また、ポジティブな雰囲気は提示回避目標を抑制していた。学業領域においても、クラスの目標構造が学業達成に影響を及ぼす (Ames, 1992) が、目標構造はSAGに対しても影響を与えることが示された。

感情との関連

Shim, Wang, & Cassidy (2013b) は、SAGと自尊心が情緒的なウェル・ビーイングに及ぼす影響を調べている。このとき、従属変数は愛情・喜び・恐れ・怒り・恥・悲しみであった。その結果、発達目標は愛情・喜びに正の、怒りに負の影響を、提示回避目標は恐れ・恥・悲しみに正の、喜びに負の影響を与えていた。提示接近目標は喜びのみに正の影響を与えることが示された。自尊心とSAGとの交互作用も報告され、自尊心の低さはネガティブな感情と強い関連がみられたが、その影響を発達目標が緩和していた。また、自尊心が低くても発達目標が高ければポジティブな感情体験が高まることが見出された。提示回避目標は、自尊心の低い学生にとっては特に有害であることが示された。

体育の授業における感情に焦点を当てた研究もある (Mouratidis & Michou, 2011)。彼らは、小学生を対象に、体育授業への動機づけとSAGが体育授業での情緒体験に与える影響を調査した。従属変数は、楽しさ・プライド・不安・怒り・恥・退屈・無力感である。その結果、発達目標は楽しさに正の、退屈に負の影響を与え、提示回避目標はプライドと恥に正の影響を与えていた。提示接近目標は、プライド・不安・怒り・退屈・無力感に対して正の影響を与えていた。

このように、発達目標は適応的な感情と、提示回避目標は不適応的な感情と正の関連があるといえるだろう。提示接近目標は多くの感情との関連がみられ、複雑な感情体験と関連することが示唆された。体育の授業では生徒の運動能力が露骨に表れる場面であり、小学生では運動能力の高さが人気につながることも多い。そのため、Shim et al. (2013b) の研究とは異なり、提示接近目標とさまざまな感情との間に関連がみられたのだろう。

社会的適応との関連

SAG と社会的適応との関連を検討した研究は複数あるが、社会的適応と一口に言っても、用いられる指標は研究者により異なる。多くの場合、生徒の適応に関連するとされるいくつかの指標を測定することで適応との関連を調査している。

SAG と適応との関連を最初に検討したのは、Ryan & Shim (2006) である。この研究では、大学生を対象に、SAG と学業上の達成目標や社会的適応との関係を明らかにすることを目的としていた。このとき、ポジティブな他者関係・自己受容・自己成長・自律性の4尺度がウェル・ビーイングとして取り上げられ、その他に社会的効力感・社会的悩みが測定された。また、授業のインストラクターによって、参加者が他のクラスメイトと上手く相互作用できているかについて評定された。その結果、発達目標はポジティブな他者関係・自己成長・社会的効力感と正の、提示回避目標はそれらと負の関連が示された。提示接近目標は有意な関連は見出されなかった。このことについて、Ryan & Shim (2006) は研究で用いた適応指標は他者との親密な関係や他者関係の満足感を測定する内容に偏っていたと指摘している。そして、学業領域において熟達目標と遂行接近目標が異なるポジティブな結果を促進するように、例えば、人気や社会的地位といった指標を扱うことで提示接近目標と適応との間にも正の関連が示されると考察している。

前述した研究を踏まえ、中学生を対象にした研究 (Ryan & Shim, 2008) では、向社会的行動・攻撃行動・不安孤立行動・社会的悩み・親友とのポジティブな関係・人気の6指標が社会的適応として測定された。その結果、発達目標は向社会的行動・親友とのポジティブな関係を高め、攻撃行動を減じていた。提示回避目標は不安孤立行動・社会的悩みを高め、攻撃行動を減じ、提示接近目標は攻撃行動・人気を高め、向社会的行動を減じることが示された。この研究では、教師による他者評定も行っている。自己評定とは異なり、発達目標は向社会的行動・攻撃行動との有意な関連はみられなかった。一方、提示回避目標と不安孤立行動・攻撃行動、提示接近目標と向社会的行動・攻撃行動間の関連は自己評価による結果と一致していた。しかし、興味深いことに、自己評定では提示接近目標と不安孤立行動との間には関連がみられなかったが、他者評定では負の関連がみられた。

大学生における SAG と社会的能力感・向社会的行動・攻撃行動・人気・不安行動・内省化行動との関連を検討した研究 (Shim & Ryan, 2012) では、従属変数の評定を学生の所属

する寮の寮監が行った。その結果、発達目標は社会的 능력感・向社会的行動と正の関連を示し、提示回避目標は不安行動・内省化行動とは正の、社会的 능력感・向社会的行動・人気とは負の関連を示していた。提示接近目標は社会的 능력感・攻撃行動・人気を促進し、不安行動を抑制することが見出された。提示接近目標を志向する学生は攻撃的であるにも関わらず、人気があり、多くの友人がおり、悩み、孤立しているようには見えないということが示された。

今後の課題

ここまで、過去の SAG 研究で得られてきた知見について述べてきた。発達目標は適応的な指標を、提示回避目標は不適応的な指標を促進し、提示接近目標は適応的・不適応的な指標双方との関連が認められてきた。これまで SAG 研究の多くは欧米で行われてきたが (Mouratidis & Sideridis, 2009; Jones, Mueller, Royal, Shim, & Hart, 2013 など)、最近ではアジアでの研究も発表されており (Shinohara, Fujii, & Takizawa, 2014; Shinohara, 2015; Liem, 2016)、国や人種、年齢に関わらず、同じ 3 下位尺度に分類されることは意義深い。共通の尺度のもとに青少年の友人関係の様相を捉えることで国際的な比較が可能となり、相違点を見出すことが可能となるからである。そのためには、本邦でも SAG 研究を蓄積していくことが求められる。そこで、本論では現在の SAG 研究の問題点を以下の 3 つの観点から論じ、展望する。

SAG の説明変数

SAG の先行研究は、SAG が影響を与える要因の検討が主で、SAG の予測因としてはクラスの目標構造や成績を取り上げた研究に留まっている (Shim et al., 2013a; Makara & Madjar, 2015)。クラスの熟達目標構造や良い成績は、その後の高い発達目標につながっていた。しかし、友人関係における目標志向性に影響を与える要因は、教室環境や過去の達成経験だけではない (岡田, 2008)。友人関係に対する目標志向性である SAG に対しては、親和動機や親子関係などが特に大きな影響を持つと考えられる。

Elliot, Gable, & Mapes (2006) は、親和動機を親和傾向と拒否不安の 2 つに分け、友人関係目標との関連を報告している。友人関係目標は、友人関係接近目標と友人関係回避目標に分類された。前者は友人との関係を深め、成長することや関係の質を高める目標であり、後者は友人との衝突や傷つけられることを避け、友人関係が壊れるような状況から回避しようとする目標である。共分散構造分析の結果、親和傾向はその後の友人関係接近目標に、拒否不安はその後の友人関係回避目標にそれぞれ寄与していた。友人関係接近目標と友人関係回避目標は、SAG における発達目標と提示回避目標とそれぞれ項目レベルで類似しているこ

とを考えると、親和動機はSAGにも効果を及ぼすと考えられる。つまり、親和傾向はその後の発達目標を、拒否不安はその後の提示回避目標に貢献するだろう。提示接近目標については、次のように考えられる。学業領域では達成動機（達成欲求と失敗恐怖）が目標志向性を規定することが見出されている（Elliot & Church, 1997; 光浪, 2010）。達成欲求は熟達目標を、失敗恐怖は遂行回避目標を予測し、達成欲求と失敗恐怖の両方から遂行接近目標は予測される。SAGは学業上の達成目標志向性の3分類と対応することから、提示接近目標には、親和動機と拒否不安の両方が効果を及ぼすと考えられる。親和動機を個人の特性に近いものと捉えると、SAGとの関連を明らかにすることでどのような生徒や学生がどのようなSAGを志向するかが明らかになる。個人の特性を変えることは難しいが、目標志向性に対してはクラスの目標構造などを通じた働きかけが可能となる。

親子関係が個人の接近・回避動機づけに影響を与える（村山, 2012）ことや親子関係によって友人関係に影響を受けることは先行研究でも示されている。たとえば、Cook, Buehler, & Fletcher（2012）によると、前青年期における親の支配的な養育態度は、4年後の友人関係における有能感を減じていた。また、親の養育態度と社会的目標との関係を検討した研究もある。親のサポートティブな養育態度は、葛藤場面における友人への復讐・支配目標を抑制し、親和目標を促進していた（McDonald, Baden, & Lochman, 2013）。SAGは、葛藤場面において子どもが抱く目標および他児の攻撃性への反応と関連する（Rudolph, Abaied, Flynn, Sugimura, & Agoston, 2011）。発達目標は協力目標とは正の、復讐目標とは負の関連があり、反対に、提示接近目標は協力目標とは負の、復讐目標とは正の関連が示された。そして、他児の攻撃性に対して問題解決やアドバイスを求めるといった反応を発達目標は促進し、提示接近目標は抑制していた。こうした先行研究は、親の養育態度が目標志向性に影響を与え、目標志向性が友人関係に影響を与えている可能性を示唆している。どのような環境でSAGが発達していくかを示すことで、親や養育者を対象とした心理教育などの介入も可能となろう。

このように、SAGの規定因を明らかにしていくことで望ましい目標志向性を伸ばすような環境づくりを勧めることができる。同時に、規定因を明らかにすることでSAGの妥当性をより強固にすることができる。SAGは学業領域における達成目標理論の枠組みを用いて概念化されたため、さまざまな変数との関連を検討するとき学業達成目標と同様の傾向を示すと仮定される。しかしながら、SAG研究の発展のためには理論的に仮定される内容を今後は実証していくことが求められる。それは、SAGと目的変数との関連を検討する際の根拠にもなり得るため、早急に研究を進める必要がある。

SAGの目的変数

これまでSAGとの関連で取り上げられてこなかった変数に社会的スキルや援助要請があ

る。これらは青年の主な対人場面である学校となじみ深いものであり、同時に、友人関係とも関係の深いものでもある。

社会的スキルは、学校や医療場でトレーニングとして取り入れられ、適応に良い影響を与えることが示されてきた。しかし、近年はスキルの獲得だけでなく、スキルを適切に実行することが重要であることが報告され、目標などの動機づけ変数に注目が集まっている（松尾・新井, 1997）。動機づけ変数の中で親和動機を取り上げた研究によると、女子では親和傾向は社会的スキルを促進し、拒否不安は抑制していた（塚本・濱口, 2003）。また、磯部・堀江・前田（2004）は、親和動機が低いとき、社会的スキルの実行が妨げられることを見出した。SAG の場合、対人関係能力を伸ばそうとする発達目標は社会的スキルの高さおよびスキルの実行と正の関連を示し、対人関係場面や他者からの悪い評価を避けようとする提示回避目標とは負の関連を示すだろう。提示接近目標は、他者からの良い評価を得ることに焦点を当てていることから社会的スキルとは正の関連があると考えられる。先述したように、社会的スキルだけでなく動機づけ変数への介入が重要であることが示唆されている。3つのSAGがそれぞれどのような社会的スキルの実行を促進・抑制するかを特定できれば、クラス目標構造などを通じ、望ましい目標志向性に働きかけることでスキルの実行という面への介入の可能性が開けると考えられる。

援助要請は、学業領域において多くの研究が蓄積され、目標志向性が援助要請を予測することが示されてきた（Ryan & Pintrich, 1997）。社会的目標と援助要請との関連を検討した研究（Ryan, Hicks, & Midgley, 1997）は、社会的地位の追求は援助要請行動の回避を促進することを報告した。遂行目標や社会的地位目標は他者からの評価を気にするという点で共通しており、援助要請を行うことは自己価値を低減する可能性があるため、援助要請行動の回避と関連する（Ryan, Pintrich, & Midgley, 2001）。Shim & Finch（2014）はSAGと学業援助要請との関連を報告しているが、相関係数の提示に留まっている。発達目標は適応的な援助要請と、提示接近目標は不適応的な援助要請と正の相関がみられた。こうした点から、志向するSAGによって援助要請行動が異なると考えられる。友人に対しては遂行目標志向性は援助要請とは関連がみられなかったとする研究もあり（野崎, 2003）、対教師と対友人とでは関係が異なる可能性も示唆される。

ここまで述べてきた研究の多くは学業達成目標と学業上の援助要請に関するものだが、友人に相談を持ち掛けるとき、その内容は学業に限らず、友人関係に関するものである場合もあろう。SAGは友人関係に対する目標志向性を表すものであるから、むしろ、友人関係に関する援助要請とは強い関連がみられると考えられる。Ryan & Shim（2008）によると、発達目標の追求は親友との良好な関係を予測するため、発達目標は援助要請とは正の関連を示すだろう。一方、二つの提示目標は援助要請とは負の関連がみられると予測される。提示回避目標を持つ個人は、社会的な悩みを抱えているが、同時に孤立しており、悩んでいても

周囲に相談などはしないのではないか。提示接近目標の場合は、周囲から孤立してはいないが、友人関係についての悩みを示すことは他者からどう評価されるか分からないため、自己への脅威となると考えられる。そのため、友人関係に関する援助要請とは負の関連があるだろう。3つの目標志向性による援助要請の違いを知ること、望ましい目標志向性に働きかけ、生徒・学生間のサポートの授受を広げることができるのではないだろうか。

これまでのところ、SAG 研究の多くは質問紙研究に留まっているが、SAG は現場への介入に適していると考えられる。教育に携わる者であれば、一度は耳にしたことのある達成目標理論を基礎に置いており、その枠組みを理解すれば SAG の理解も容易い。SAG 尺度は 12 項目と短く、施行に時間がかからず簡易である。学業領域では、達成目標についての研究・介入・効果検証が数多く行われているので、それらをロールモデルとすることも可能である。このように考えると、SAG 研究と現場をつなぐものとして社会的スキルや援助要請というテーマは最適である。

SAG と目的変数の媒介要因

最後に、SAG と目的変数とを媒介する要因の可能性について述べる。先行研究の大きな問題点として、SAG から目的変数への直接的な影響についての検討に留まっており、媒介要因を仮定した研究が少ないことが挙げられる。特に、SAG が主要な影響を及ぼす社会的適応との関連を検討した研究では、目的変数に行動や評価といった異なる概念が用いられているにも関わらず、それらを「適応」として一括りに扱っている。たとえば、向社会的行動や攻撃行動は行動面の指標であり、人気や親友とのポジティブな関係は周囲から人気があるかどうか、親友とどの程度親密であるかについての個人の知覚や評価である。この場合、行動的側面と認知的側面が区別されておらず、その因果関係が不明瞭となっている。しかし、向社会的行動や攻撃行動が人気や周囲との関係に影響しているといった可能性も考えられる。Rodkin, Ryan, Jamison, & Wilson (2013) は、小学生を対象に、SAG と向社会的行動・攻撃行動・好ましき・人気との関連を共分散構造分析により検討した。その結果、発達目標および提示接近目標は、それぞれ、向社会的行動と攻撃行動に正の影響を与え、それらが好ましき・人気に正の影響を与えていた。すなわち、向社会的行動は発達目標と好ましきとを媒介し、攻撃行動は提示接近目標と人気とを媒介していることが見出された。つまり、追求する目標志向性によって異なる行動が生じられ、行動によりその後の評価が異なっていた。

本邦にも、友人関係場面における目標志向性が抑うつや充実感に与える影響を検討した研究がある (黒田・桜井, 2001; 2003)。彼らは、目標志向性を経験成長目標・評価接近目標・評価回避目標の 3 つに分類しているが、これらは SAG の発達目標・提示接近目標・提示回避目標に対応するものと考えてよいだろう。パス解析の結果、経験成長目標は向社会的行動に影響し、行動はその後のポジティブな出来事の頻度の知覚につながり、それが抑うつを抑

制し、充実感を促進していることが示された。そして、評価接近目標は、関係構築・維持行動に影響し、それがその後の出来事の知覚、抑うつと充実感の促進につながっていた。つまり、目標志向性—行動—出来事—抑うつ・充実感という順に影響があることが示され、行動や出来事が目標志向性と抑うつ・充実感を媒介していた。ここでも、目標志向性が直接抑うつや充実感に影響を与えるのではなく、目標志向性はまず行動を生起することが示された。

これらは、SAGと好ましき・人気・抑うつ・充実感といった適応に関連する指標との間に媒介要因が存在すること、そして、SAGの3下位尺度によってその要因が異なることを示している。このように、これまで検討されてきたSAGと従属変数との間には現在の想定よりも複雑な関係があると考えられる。とりわけ、提示接近目標は適応的な効果も不適応的な効果も有している。前述したように、向社会的行動が媒介する発達目標とは異なり、提示接近目標は人気に対しては攻撃行動が (Rodkin et al., 2013)、抑うつ・充実感に対しては関係構築・維持行動が媒介要因として機能していた (黒田・桜井, 2003)。これらは、提示接近目標が発達目標とは異なる形で従属変数に影響を与えていることを示すものである。提示接近目標がどのように生じ、どのように影響するかを明らかにすることで、その両義性について理解を深めることができるだろう。

今後は、SAGと目的変数、そして媒介要因の可能性を考慮し、それぞれの影響の過程をより詳細に検討する必要があるだろう。加えて、用いる変数の概念的な位置づけを明確にし、体系的に研究を進めていくことが求められる。

注

- 1) なお、SAG尺度の日本語訳は筆者が行った。英語の堪能な第三者により原文および訳文のバックトランスレーションが行われ、筆者が文言の差異を調整した。

引用文献

- Ames, C. (1992). Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology, 84*, 261-271.
- Cook, E. C., Buehler, C., & Fletcher, A. C. (2012). A process model of parenting and adolescents' friendship competence. *Social Development, 21*, 421-481.
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review, 95*, 256-273.
- Elliot, A. J., & Church, M. A. (1997). A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology, 72*, 218-232.
- Elliot, A. J., Gable, A. L., & Mapes, R. R. (2006). Approach and avoidance motivation in the social domain. *Personality and Social Psychology Bulletin, 32*, 378-391.
- Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001). A 2×2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology, 80*, 501-519.
- Jones, M. H., Mueller, C. E., Royal, K. D., Shim, S. S., & Hart, C. O. (2013). Social achievement goals:

- Validation among rural African American adolescents. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 31, 566-577.
- 磯部美良・堀江健太郎・前田健一 (2004). 非行少年と一般少年における社会的スキルと親和動機の関係. *カウンセリング研究*, 37, 15-22.
- 黒田祐二・桜井茂男 (2001). 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係. *教育心理学研究*, 49, 129-136.
- 黒田祐二・桜井茂男 (2003). 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム——ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討——. *教育心理学研究*, 51, 86-95.
- Liem, G. A. (2016). Academic and social achievement goals: Their additive, interactive, and specialized effects on school functioning. *British Journal of Educational Psychology*, 86, 37-56.
- Makara, K. A., & Madjar N. (2015). The role of goal structures and peer climate in trajectories of social achievement goals during high school. *Developmental Psychology*, 51, 473-488.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1997). 感情と目標が児童の社会的行動の選択に及ぼす影響. *教育心理学研究*, 45, 303-311.
- McDonald, K. L., Baden, R. E., & Lochman, J. E. (2013). Parenting influences on the social goals of aggressive children. *Applied Developmental Science*, 17, 29-38.
- 光浪睦美 (2010). 達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響——認知的方略の違いに着目して——. *教育心理学研究*, 58, 348-360.
- Mouratidis, A., & Michou, A. (2011). Self-determined motivation and social achievement goals in children's emotions. *Educational Psychology*, 31, 67-86.
- Mouratidis, A., & Sideridis, G. D. (2009). On social achievement goals: Their relations with peer acceptance, classroom belongingness, and perceptions of loneliness. *Journal of Experimental Education*, 77, 285-308.
- 村山航 (2012). 生物の根源的な動機を考える——接近・回避動機づけ——. 鹿毛雅治 (編) モティベーションを学ぶ12の理論——ゼロからわかる「やる気の心理学」入門!—— (pp.73-99) 金剛出版.
- 野崎秀正 (2003). 生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響——抑制態度を媒介としたプロセスの検証——. *教育心理学研究*, 51, 141-153.
- 岡田涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築. *教育心理学研究*, 56, 575-588.
- Rodkin, P. C., Ryan, A. M., Jamison, R., & Wilson, T. (2013). Social goals, social behavior, and social status in middle childhood. *Developmental Psychology*, 49, 1139-1150.
- Rudolph, K. D., Abaied, J. L., Flynn, M., Sugimura, N., & Agoston, A. M. (2011). Developing relationships, being cool, and not looking like a loser: Social goal orientation predicts children's responses to peer aggression. *Child Development*, 82, 1518-1530.
- Ryan, A. M., Hicks, L., Midgley, C. (1997). Social goals, academic goals, and avoiding seeking help in the classroom. *Journal of Early Adolescence*, 17, 152-171.
- Ryan, A. M., & Pintrich, P. R. (1997). "Should I ask for help?" The role of motivation and attitude in adolescents' help-seeking in math class. *Journal of Educational Psychology*, 89, 329-341.
- Ryan, A. M., Pintrich, P. R., & Midgley, C. (2001). Avoiding seeking help in the classroom: Who and why? *Educational Psychological Review*, 13, 93-114.

- Ryan, A. M., & Shim, S. S. (2006). Social achievement goals: The nature and consequences of different orientations toward social competence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *32*, 1246-1263.
- Ryan, A. M., & Shim, S. S. (2008). An exploration of young adolescents' social achievement goals and social adjustment in middle school. *Journal of Educational Psychology*, *100*, 672-687.
- Shim, S. S., Cho, Y.J., & Wang, C. (2013a). Classroom goal structures, social achievement goals, and adjustment in middle school. *Learning and Instruction*, *23*, 69-77.
- Shim, S. S., & Finch, W. H. (2014). Academic and social achievement goals and early adolescents' adjustment: A latent class approach. *Learning and Individual Differences*, *30*, 98-105.
- Shim, S. S., & Ryan, A. M. (2012). What do students want socially when they arrive at college? Implications of social adjustment goals for social behaviors and adjustment during the first semester of college. *Motivation and Emotion*, *36*, 504-515.
- Shim, S. S., Wang, C., & Cassady, J. C. (2013b). Emotional well-being: The role of social achievement goals and self-esteem. *Personality and Individual Differences*, *55*, 840-845.
- Shinohara, Y., Fujii, T., & Takizawa, E. (2014). The relations between social achievement goals and adjustment in Japanese and Korean women. *Poster Presented at The 28th International Congress of Applied Psychology* (Paris, France).
- Shinohara, Y. (2015). The relation between social achievement goals, social skills and adjustment. *Poster Presented at The 14th European Congress of Psychology* (Milan, Italy).
- 塚本貴文・濱口佳和 (2003). 親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響：中学生の場合 筑波大学発達臨床心理学研究, *15*, 45-55.

ENGLISH SUMMARY

A Critical Review of Social Achievement Goals

SHINOHARA Yuka

Recently, an increasing amount of research has been published concerning social achievement goals. Social achievement goals represent goal orientation toward social competence in the social domain. The present article reviewed preceding social achievement goal studies according to four major topics, namely; academic engagement, classroom goal structures, emotion and social adjustment. From past research, the next three issues were discussed and suggestions were made for future research. The first issue was to identify predicting variables to strengthen the validity of social achievement goals which relies mainly on a theoretical framework. The next issue was to examine the relationship between social achievement goals and variables which are suitable for interventions. Finally, past research has leaned toward examining the direct effects of social achievement goals to subsequent variables. However, future research needs to consider mediating variables with regard to causal relationships.

Key Words: social achievement goals, goal orientation, interpersonal relationships, adolescence, review.